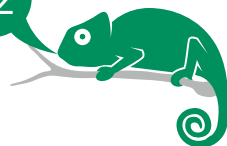


| 特集 |

化かしが得意な を捕まえろ!

Season2



非典型像に対する診断の 守備力を鍛えよう!

企画 | 佐藤直行

本誌2024年10月号で取り上げた「カメレオン疾患」特集の第2弾です!「ミミック」が“looks like one, but isn't.”という概念であるのに対して、「カメレオン」は“doesn't look like one, but is.”という概念になります(図1、2)。非典型的プレゼンテーションのパターンはいくつかありますが¹⁾、「カメレオン」は“一見その疾患らしく見えない(ほかの疾患に見える)非典型的症状”と言え、特に厄介な非典型的プレゼンテーションとなります。そこには臨床で注意すべきピットフォールが満載ですが、「カメレオン」も「ミミック」も教訓的なものであり、それらを把握しておくことは重要です。生成AIは医師と同等かそれ以上の診断能力を備えていると言われますが、生成AIでも非典型例の診断にはまだ弱いところがあります(GPT-4での研究)²⁾。誰しも若手のときに、自分としては可能性が低いと思っていた疾患が、指導医から「あの疾患ってこんなプレゼンテーションもあるよね」と指摘されて驚いたことがあるのではないのでしょうか。カメレオン疾患として騙されやすいゲシュタルト(全体像)を認識することは、臨床推論における「守備力」を高めることに繋がります(→前作ご執筆の山本大介先生曰く、「勝てる、より、負けない」診断スキル)。この視点は、System 1で「ピンときて当てにいく」という部分もあるかもしれませんが、ピットフォール回避のためにSystem 1と2を使って「ちょっと立ち止まって考える」プロセスとしても機能していると考えます。

第2弾となる本特集では、機能性疾患も含めてコモンな疾患を多く取り上げつつ、多彩な臨床像を取りうる、診断の難しい疾患も追加しました。「カメレオン」と「ミミック」をどう診断戦略に組み込むのかも【総論】の対談にて志水太郎先生よりご解説いただき、さらに視点を広げやすい内容に企画しました。典型像を追いかけるだけでは捕まえきれない疾患は多いですが、その非典型像のゲシュタルトを捉え、“負けない診断力”を養える特集号となりましたら幸甚です。

文献

- 1) Harada Y, et al : Atypical presentations at risk for diagnostic errors in internal medicine; A scoping review. J Gen Intern Med 41(7) : 1937-1956, 2026 PMID 41085962
- 2) Shikino K, et al: Evaluation of ChatGPT-generated differential diagnosis for common diseases with atypical presentation ; Descriptive research. JMIR Med Educ 10 : e58758, 2024 PMID 38915174

カメレオンな疾患

カメレオン
chameleons



(doesn't look like one, but is.)*
その疾患っぽく見えない臨床像なのに、その疾患だった。
例：多関節炎が前面に出ていた症例が
IE(感染性心内膜炎)だった。

ミミック
mimics



(looks like one, but isn't.)*
その疾患っぽい臨床像なのに、違う疾患だった。
例：消化管穿孔っぽかったのに
DKA(糖尿病性ケトアシドーシス)だった。

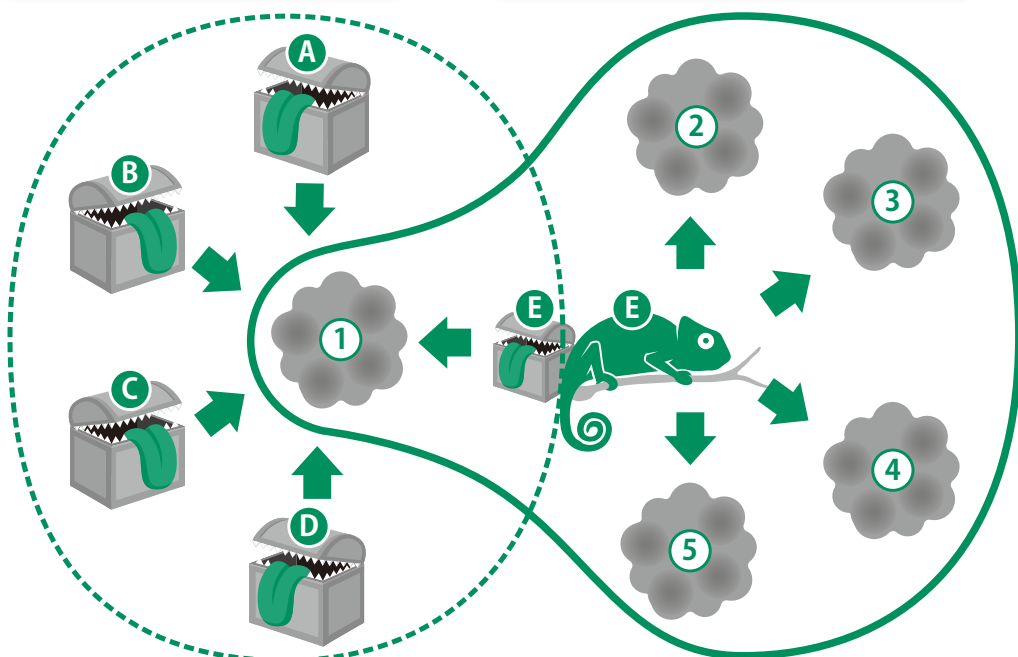
図1 | カメレオンとミミック

*PMID:23315457

疾患①から見ると
疾患A～Eは自身に化けるミミック



疾患①を想起したら疾患A～Eの可能性も考える
(=Pivot & Cluster戦略)



疾患Eは疾患①～⑤に化けるカメレオンな疾患
(疾患①にとってはミミック)



今回も化ける回数が多く、
騙される状況(≠非典型例)が多い
厄介な疾患を取り上げる

図2 | カメレオンとミミックの関係